

関東大震災—犠牲者の無念に想いを馳せて—

北原 糸子

国立歴史民俗博物館客員教授

はじめに

関東大震災 90 周年を迎えた今年は、各所でさまざまなイベントが開催される。4 万人の人々が火に包まれたというこの被服廠跡に建てられた慰霊堂（震災記念堂）において、90 周年行事が行われることは意義深い。さらに、3.11 の東日本大震災における 2 万人に達する犠牲者の追悼もこの周年に重ねられ、このイベントに加わるわたしたちの震災犠牲者への思いはより深く心に刻まれる。

*震災の新史料の可能性はあるのか

絶えず、膨張と更新をくりかえしてきた東京という都市に、90 年も前の震災に関する新しい史資料が出てくるのかという疑問はあるかもしれない。東京は震災で 7 万人近い人命が失われ、また、多くの文化財が灰燼に帰した。しかもその後には戦災で再び、かけがえない人の命とモノを失った。しかし、残されているものはあるのである。

*慰霊堂（震災記念堂）の存在意義

震災犠牲者の供養のために、市民の寄付を元に建立されたこの慰霊堂は戦災を免れた。そして、保管されている震災当時の諸事を伝える重要な史資料もほぼ手つかずに残されていた。このことは、慰霊堂が保管する写真調査をさせていただいた 2006 年（平成 18 年）以来の調査のなかでわかったことである。今回は、供養の意味を込めて、「震災死亡者調査票」なるものを紹介しようと思う。この調査票は、震災当時の東京市長永田秀次郎がこの被服廠跡で焼死した人々の調査を発意して作られたものである。慰霊堂を建立しても、祭られる人々の名前もわからないのでは犠牲者は救われられないという思いから、3 か年を要して 5 万人余の名簿が作られた。彼は個人としても、高野山に霊牌堂を建て、そこに特殊な容器と特殊な紙を使用して一万年保存を目指して霊名簿を納めてもいる。

*災害への備えとして

この調査票は、姓名はもちろんだが、本籍、居住場所、死亡場所の各項目か

らなる。この調査票から、今わたしたちは何を知り、何を今後に生かすことができるのだろうか。

東日本大震災では、いまなお、津波にのまれた行方不明者が残る。バラック住まいする被災者は30万人に上る。福島では帰りたくても帰れない状態が続いている。未だ災害は終息していない。

都市復興が喧伝される関東大震災だが、関東大震災の傷跡は深い。死亡調査票をみるにつけ、そのことを思い知らされるのである。同じ場所に逃げ込んだ人々が火に包まれ、固まって犠牲になった。今回の東日本大災害では、まさかここまで津波が来るとは思わないと逃げずにいた人々が津波に襲われたという。人間の思い込みは被害を大きくするようだ。関東大震災の資料を目にしながらも、東日本大震災のことに絶えず想いが及ぶ。

プロフィール

北原 糸子（きたはら いとこ）

国立歴史民俗博物館客員教授

1939年（昭和14年）山梨県生まれ、津田塾大学、東京教育大学大学院修了、江戸・東京の歴史を調べてきたが、安政江戸地震を研究して以降、災害社会史を中心に研究してきた。

『都市と貧困の社会史』（吉川弘文館）、『地震の社会史』（講談社学術文庫）、『関東大震災の社会史』（朝日新聞社）など。